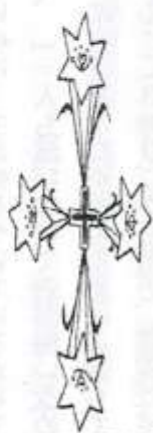


東中国キリスト者

障害を共に学び共に担う会

シャローム



第一六七号

二〇二六年六月五日発行

目次

説教	藤田和也	伝道師	(1)
鳥取支部 「春の日集会」			
鳥取こども学園 理事長	藤野謙一		(3)
人権学習会報告		宮脇俊昭	(5)
会計報告		宮脇俊昭	(7)
編集後記		宮脇俊昭	(8)

説教

日本基督教団 岡山教会

伝道師 藤田和也

「何一つ変わらない」

ペテロの手紙二 三章1〜4

この礼拝は岡山教会の4階教室で守られています。同時に2階の礼拝堂では、支援学校に通う高校生の方々がパイプオルガンを見学されています。車椅子を利用されていることもあり、なかなか校外学習の機会を確保しづらいと伺いましたが、この会堂のスロープやエレベーター、車椅子対応のトイレといった設備によって、見学のハードルは比較的低かったのではないかと思います。

歩行困難な人が移動できるようにと、車輪のついた椅子が発明される。しかし、いざ出かけようとしたら、経路の至るところに段差があるために、その椅子を活用できない。そこで、段差を減らす工夫が施され

る。人間の痛みと気づき、努力の積み重ねによって、世の中は少しずつ変えられてきました。その結果、これまで教会を訪れなかった高校生が神様を賛美する機会を得たのです。

こうした人間の進歩を思えば、「世の中のこととは、天地創造の初めから何一つ変わらないではないか」（二ペト3の4）という「欲望の赴くままに生活してあざける者たち」（3の3）の発言はあまりにも悲観的ではないかと感じられます。これは主イエスの再臨を疑問視する人々の発言で、「世の中が何も変わらないのだから、終わりの日に主イエスが来られるという再臨もどうせ嘘だ」という主張です。

彼らほどではないにせよ、私たちも同じ過ちが繰り返される現実と直面すると、「なぜこれほどまでに人間は愚かなのか」と、うんざりしてしまうこともあります。そんなとき「神様なんて本当にいるのだろうか」と疑いたくなります。それゆえ、「何一つ変わらない」という言葉は単なる嘲りでは

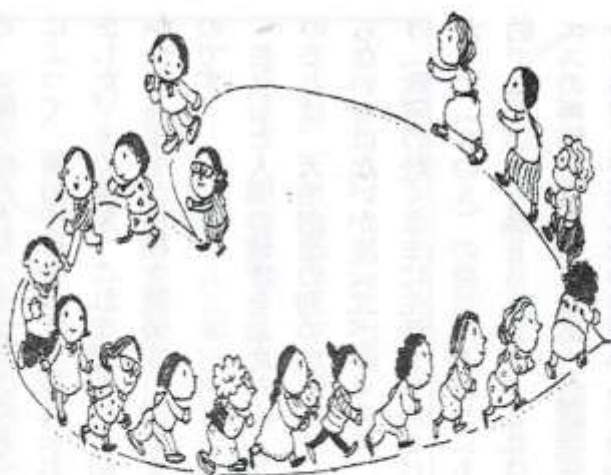
なく、「神は私たちを助けてくださらないのではないか」という不安の表れでもあるといえます。世の中が変わらないとは、すなわち再臨は起こらないということであり、再臨が起こらないとは、すなわち神は私たちの生活に介入してくださらないということだと、と考えてしまうのです。

手紙の著者は、こうした「あざける者たち」の存在を念頭に置きつつ、「再臨はある」という信仰に固く立つようと私たちを勧めています。主イエスがまた戻ってこないのは、主が嘘をついているからではなく、「一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられる」（3の9）からだ、著者は述べます。主は私たちのために忍耐してくださっているのです。「わたしをお遣わしになった方の御心とは、わたしに与えてくださった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させることである」（ヨハ6の39）という主イエスの御言葉が思い起こされます。

もし今この瞬間に世の終わりを迎えるとしたら、私たちは神様から与えられた使命を全うしたと胸を張って言えるでしょうか。使徒パウロが、「この世を去って、キリストと共にいたいと熱望し」（フィリ1の23）ながらも、伝道者としての使命のために「肉において生き続け」（1の22）ることを選んだように、私たちも自らに与えられた時間を使って、主に仕えなければなりません。ここに集われているキリストの皆様も、障害を共に学び共に担うという使命のために神様に召し出されています。共に学び共に担うべき障害がこの世にある限り、神様は皆様を用いてくださるはずで、主イエスがまた戻って来られないということは、私たちにまだ果たすべき使命があることを示しています。

神は私たちを生かすために独り子の命さえ惜しまれません。主イエスは十字架において、私たちを忍耐深く待つてくださったという神の愛を示してくださいました。「世の中は何一つ変わらない」と嘆きたく

なる私たちですが、本当に変わらないのは私たちを忍耐深く待つてくださる神の愛ではないでしょうか。イエスを主と信じる私たちは「何一つ変わらない」と嘆く世の声に耳を傾け、本当に変わらない神の愛をもってその嘆きに応える者でありたいと願います。



千障共 鳥取支部の2026年「春の日集会」

「この子を世の光に」という名命
鳥取子ども学園が歩むキリスト教
社会福祉の実践

社会福祉法人 鳥取子ども学園 理事長

(児童養護施設 鳥取子ども学園 園長の

藤野 謙一

1. はじめにー糸賀一雄の哲学

この度は、障害を共にする共に担う会(千障共)鳥取支部の2026年「春の日集会」にお招きいただき、皆様と尊い時間を共有できただよを心より感謝申し上げます。

日本の障害児福祉の父・糸賀一雄先生は鳥取教会で受洗され、『「この子を世の光に」といふ言葉を残されました。私たちはともすれば、支援を必要とする子どもたちを「可哀想な保護の対象」として上から見てしまいがちです。しかし、そうではありませ

ど子ども等しく、この社会の闇を照らし、社会を変えていく主体的な「光」そのものなのです。鳥取子ども学園が目指し続けてきたのは、大人が「子どものために」何かを施す施設ではなく、「子どもと一緒に」社会を変え、その子がその子らしく輝ける場所を創り出すことでした。

2. 逃避から名命へー私にとっての「隣人」とは

私自身の歩みを振り返りますと、そこには激しい葛藤と神様の不思議な導きがありました。私の父は社会運動家であり、日本三大ドヤ街の一つである横浜の「寿町」でホームレスの方々の人権のために闘っていました。私はそんな父の背中を見ながら後に、鳥取子ども学園の敷地内で育ちました。

当時の私にとって、あまりに生々しい「福祉」が身近すぎる環境は息苦しく、「普通」の家庭への強い憧れから、逃げるように開発エンシニアの道へと進みました。しかし、社会の冷たさや偏見に直面して打ちの

めされていた時、物理学者でありながら子どもたちに寄り添う道を選んだ広岡知彦氏(東京大学の研究者でありながら、同時に自立援助ホームを運営していた)の言葉に出会います。「物理科学をやる人はいくらでも替わがきく。でも、この子たちに寄り添う人は少ない。だから僕は東大を辞める」。この言葉は、私の心を激しく揺さぶりました。一度は福祉から逃げ出した私だからこそ、気づかされた「隣人」の存在がありました。神様は、逃げ惑う私をもう一度、この場所に呼び戻して下さったのです。

3. 苦難を越えてー祈りと対話が紡いだ120年の歴史

今年、鳥取子ども学園は創設から120周年を迎えます。1906年(明治39年)、松江育民院主・福田平治の呼びかけで、尾崎信太郎ら鳥取教会の有志が立ち上がり、「私立感化教育所鳥取孤児院」を設立しました(後に差別的「ユアンス」を避けて鳥取育民院と改称)。創設期から20年間、子ど

もと寝食を共にした斎藤文太郎・里つ夫妻は、一日も横になって休む姿を見せなかったといえます。それは強靱な肉体というより、神様のお支えによる信仰の力でした。

1943年の鳥取大震災で建物が崩壊した際、当時の園長・藤野武夫は絶望の淵に立たされたながらも「頑張らねばならぬ。子供達のために」と自ら奮い立たせました。1944年の移転時には地域からの激しい差別や暴力にさらされましたが、決して暴力で返すことなく祈りと対話で説得を続け、ついには石を投げていた人々を支援者へと変えていきました。また、1951年には藤野とりの切実な祈りとアメリカの宣教師らの支援により、現代の地域支援の先駆けとなる保育所「鳥取みどり園」が誕生しました。

4. 「子どものために」から「子どもと一緒に」へ

前理事長・藤野興一の時代には、施設にいる子どもたちが進学を諦める現状

に憤り、「施設にいるからできないことを絶対させない」という執念で高校入生運動、さらには大学進学の道を切り拓きました。また、職員不足の逆境を逆手に取り、「子どもたちに協力してもらい、一緒に施設を運営する」という「子ども主体」の哲学を実践しました。1988年には国連の「子どもの権利条約」に先んじて全国の高校生交流会を鳥取で開催し、子どもたちが自ら声をあげる場を創り出したのです。

5. 制度の狭間で――悲劇を繰り返さないための即応

現代の施設にやってくる子どもたちは、親がいても繋がりを絶たれ、地域の孤立から虐待や貧困に苦しむ「社会の歪みの縮図」を生き延びています。

かつて、一人の少女が自ら命を絶ちました。「私の手を開けば、あふれるほどのこぼれおちるほどの愛があるのに、親の愛が欲しいのです。親の愛がなければ悪魔の子になってしまうのです」といって、胸が張り

裂けるような遺書を残して。私たちは、このような悲劇を二度と繰り返してはなりません。だからこそ、国の制度ができるのを待つのではなく、二ード（必要）があれば1984年に自ら「自立援助ホーム（鳥取フレンズ）」を立ち上げるなど、すぐに行動を起こしてきたのです。

6. 子どもの声を聴き抜く――未来を拓くアドボカシー

今、私たちは「子どもの声が全てを变える」と確信し、新たな挑戦をしています。パブリック・ヒアリング（公聴会）等を通じて、児童養護施設出身者による当事者団体「Exit Tape & Home」の若者たちが、自らの声を社会の意思決定者に直接届けています。

ある児童養護施設出身者で様々な支援を受けて海外留学を果たした若者は、私たち大人に向かって力強く訴えました。「大人の『無理』という言葉で片付けず、どうすればできるか一緒に考えよう」と。

「これこそが、私たちが直面すべき真理です。私たち大人が乗り越えるべき最も難しく、そして最も大切なことは、「子どもの話を最後まで聴き、子どもには自ら未来を創り出す力があると信じ抜くこと」に他なりません。」

7. おわりにー愛はいつまでも絶えることがない

ポーランドの小児科医で、子どもの権利条約の基礎を作ったヤヌス・コルチャックは「子どものためなら、悪魔とも手をくむ」と言いました。私たちは、「出会った一生のつきさし」という覚悟をもって施設運営をしています。

「愛はいつまでも絶えることがない」。どれほど社会が冷たく見えても、決して諦めない心があれば、子どもたちの声は必ず社会を変える光となります。これから、キリストの御名と祈りを合わせ、互いの弱さや重荷を分かち合いながら、「この子らを

世の光に」という名命の道を一歩ずつ歩んでまいりたいと願っております。



人権学習会報告

日本基督教団 倉敷教会

宮脇 俊昭

日本基督教団東中国教区社会委員会では2025年6月14日、光明園家族教会の難波幸矢さんによるご講演と、光明園・愛生

園内のご案内という貴重な機会をいただきました。岡山ではよく知られた研修内容であるためか、今回は社会委員・講師以外の参加者は8名と少なめでした。その中には、西中国教区甲山教会の上内牧師、上下教会の杉原さんも参加してくださいました。皆さんは、難波さんがおっしゃる「国がしかしたこと」を自らの目で確かめたいという思いで来られたのだと思います。

学習会は、まず光明園家族教会で難波さんから邑久光明園と長島愛生園について、多角的な視点からお話を伺うことから始まりました。その後、フィールドワークとして光明園と愛生園の園内を見学しました。

最初に西側の島にある光明園を回りました。光明園内には各宗教の礼拝所・寺院が並ぶ通りがあります（光明園家族教会はその寺町通から少し離れた場所に建てられています）。その先にある納骨堂を訪れました。ここには、信仰の違いに関わらず、療養所で人生を共に過ごされた方々の遺骨が納められています。

次に、かつて療養所内で使う物資を運ぶために使われていた栈橋跡を見ました。島の西側の栈橋からトロツコのようなもので物資を搬入していたそうですが、途中には急な崖があり、そこにもレールを敷いて引き上げていたとのことでした。かなり危険な作業であったことが想像されますが、安全の配慮はどのようにされていたのか、思いを巡らせました。

その後、車にて島の東側に移動し、もう一つの療養所である長島愛生園を見学しました。愛生園にもキリスト教会（単立・曙教会）があり、カトリック教会もあるとのことでした。

愛生園側で最初に訪れたのは栈橋でした。ここでは、入所者（患者）の方々が「社会との別れ」を覚悟された場所でもあったと聞き、胸が締めつけられる思いがしました。栈橋の近くには「回春寮」があり、愛生園に連れてこられた人が最初の約1週間を過ごす場所でした。消毒から始まり、広い大部屋にベッドが並べられていたそうです。

園内を進むと、東側には邑久高等学校新良田分校がありました。高校があるということとは、それだけ若い人たちも多く入所していたということですね。これは1930年頃から約30年間続いた「無癪県運動」と無関係ではないと思われます。日本中の各県が競うようにして癪病患者を摘発し、一掃しようとした運動で、県や警察が隠れていた患者を探し出していったとされています。その結果、若い患者も多く集められたのでしよう。癪患者に対する差別はひどく、文章にすることもためらわれるような言葉が使われていたといえます。「無癪県運動」をぜひネットや図書館で調べていただければと思います。

今回の学習会とは別に、社会委員会では長島愛生園内にかつて存在した「聖書書舎」にも関心を寄せています。1961年から10年間続いた聖書書舎で、原田季夫牧師が「療養者自身が牧師となり、療養所内で伝道してほしい」との願いを込めて運営され

ました。約20名の伝道者が全国の療養所で活動されたとのことですね。

私たちのすぐ近くにハンセン病療養所があり、そこで宣教がなされ、さらに聖書学校が置かれ伝道者が育てられていたという事実。この奇跡のような出来事を、教区内の皆さんにも知っていただきたいと思っています。現在、光明園には約50名、愛生園には約70名の元患者の方々が生活しておられます。

それぞれの教会の教会員も、片手で数えるほどになっているとのことですね。難波幸矢さんは「療養所内の教会は、遠くない将来に消えていく運命にある」とよくおっしゃいます。その「遠くない将来」が近づいていることを感じつつも、主に守られ慰められながら歩んでおられる教会員の皆様のために祈りたいと思います。また、療養所内で働いておられる方々への伝道がなされることも願い、祈り続けたいと思います。

この原稿は東中国教区社会委員会「声」誌より転載しました。

会 計 報 告

(26年3月1日～26年4月30日)

会計 宮脇俊昭

収 入		支 出		
会費	0	会議費	役員会(3/13)	3,820
		交通費	会場費、説教謝礼	1,760
		会場費	總會資料印刷、資料送料	2,000
		資料コピー		60
(会費累計)	(26,000)	活動費		70,754
献金	0	鳥取活動費		70,000
		現金封筒		21
		送料(書き留)		733
貯金利息	318			
		事務消耗品費	通知・払込料金	550
小 計	318	小 計		75,124
前 月 より	565,473	次 月 へ		490,667
合 計	565,791	合 計		565,791

2月末現在資金残高

定額預金	0
普通預金	263,888
振替口座	195,069
現金	31,710
合 計	490,667

(年会費)

無し

(献金)

無し

編集後記

宮脇 俊昭

愛するキ障共会員の皆様いかがお過ごしでしょうか。いつもの難波幸矢さんの編集後記の書き出しをまねてみました。でもこの書き出しが一番しっくりきますね。今号は難波さんがおやすみで宮脇が編集後記を書かせていただいております。今号の『シャローム』はいかがでしたでしょうか。

昨年12月に行いましたキ障共総会での藤田和也伝道師の説教、そして鳥取ことも学園の藤野謙一理事長の講演要旨を掲載させていただきました。また、社会委員会活動報告誌『声』から、宮脇が書かせていただきました人権学習会の報告も転載させていただきました。

藤田先生、藤野理事長のお二方の味わい深いお話を改めて読ませていただく機会となりました。

また、12月の総会では藤田先生がギターで賛美をリードして下さい、お説教もし

てくださいました。大活躍に心より感謝いたします。藤野先生のお話を読むまでは鳥取ことも学園のことを存じ上げませんでした。その尊いお働きに感謝ですね。またご紹介くださった系賀一雄先生の「この子を世の光に」という大切な言葉を改めてかみしめる時となりました。

今年は7月6日7日の二日間、全国キリスト共障害者団体の修養会・総会が岡山教会で開催されます。どうぞ一緒に集い各地の皆さんのお話を伺いながら懇談の時を持てたらと願っております。

暑い日が少しずつ増えてまいりました。キ障共の皆さまの上に主の守りがありますように。どうぞご自愛ください。お祈りしております。



全国キ障協 総会案内

日時 2026年

7月6日 午後2時～

7日 午後0時まで

場所 岡山教会 4階ホール

総会

講演 三石・和氣教会

牧師 山田邦彦

「シャローム」 第一六七号

発行日 二〇二六年六月五日

発行所 東中国キリスト者

障害を共に学び共に担う会
発行人 事務局長 難波幸矢

〒七〇三ー八二六五

岡山市中区倉田六五八ー八一

電話 〇八六・二七六・二四六七